
魔王城は今日も平和です

悲劇のM

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔王城は今日も平和です

【Nコード】

N9333F

【作者名】

悲劇のM

【あらすじ】

突発的に連載始めちゃいました。いつまで続くか分かんないけど、軽い気持ちで読んで下さい。ファンタジーコメディです。

角を生やした幼女のAAを求めた結果がこれだよ！（前書き）

携帯じゃずれちゃうかも

角を生やした幼女のAAを求めた結果がこれだよ！

「ゆうしゃー、あそんでー！」

幼女趣味の変態が拝めば地の果てまで飛んでいつちまいそんな笑顔で、魔王は俺との遊びを頼んできた。というか、俺の理性も崩壊寸前かもしれない。ただ勘違いして欲しくないのは、俺は幼女趣味の変態ではないということだ。断じて、違う。

そもそも何でこういうことになっちまったのだろうか。いや、俺は知ってるんだが読者に知ってもらわなきゃどうしようもない。面倒くさいので、回想に入る。ほわんほわんほわわーん。

「遂に来たぞ。ここが、魔王の間か……」

荒い息を抑えながら、俺はここまでの道のりを思い出す。水の都で津波にやられた、回復しか能の無い僧侶。常に賢者タイムを維持していたが、火炎の洞窟でマグマに吞まれた賢者。何だかんだで良い奴だったけど、実は敵のスパイだったナイト。あいつらの犠牲があつて、俺はここにいます。

最終的に勇者である俺一人になっちまったわけだが、これは作品の都合上仕方無いことである。あいつらがいたら作品上問題が（これより先は自主規制とさせていただく）。

伝説の剣を握る右手には、じつとりとした汗が生じる。かつて大地と海を創造し、そして人類を恐怖のどん底に突き落とした魔王。いったいどんな悪人面をしているのだろうか。

だが、これだけは分かる。今まで戦ってきたどんな強敵よりも、闇の主バハムートよりも、海の王者ポセイドンよりも、万引きを絶対許さなく、勝手に人のことを『どろぼう』と名づける雑貨屋の店主よりも、魔王は強い。

魔王の間へ続く仰々しい大きな金細工の扉を開ける。黒く禍禍しいオーラが一面を支配するその部屋は、びっくりするほど広がった。怪しい銅像や大きな支柱がそこから中に聳え立つ中、背を向けた中央の玉座に鎮座する影があった。きつと、そいつが魔王に違いない。俺は剣の柄を握る右手の力を強めた。

「お前が魔王だな」

玉座に座る奴に怒号を発する。数秒の間を置いて、玉座ごとこちらに向き直った。暗さ故に影しか見えないが、何だかとても小さい。「えへっ、よくきてくれたね、ゆうしゃ！」

んーと、こういうのは『よくここまで来る事が出来たな勇者よ、誉めてやろう。しかし、貴様はここで死ぬのだ！』という野太い声が響くんじゃないのか？俺の予想に反して、その声は非常に可愛らしい、女の子の声だった。否、幼女の声だった。それに、平仮名だった。

その時、パツと部屋が明るくなる。これはご都合主義展開とは違う。何故か、明かりがついちゃったのである。そこ、作者を責めるんじゃないよ。

声と同じく、明かりに照らされた魔王の姿は、やはり幼女のそれだった。歳は10歳そこらで、薄い金色の髪は腰まで伸びている。頭部にはちゃんとそれらしい双角もついているが、可愛い幼女の頭の上だと威厳もクソも無い。フリフリの白いドレスは小さな細身の体にこれでもかとはかりに似合っている。垂れ目がちな双牟は、見る者を何かに目覚めさせるようだ。まあ、俺は目覚めなかったが。うん、目覚めなかったよ！

「お前は誰だ？」

真剣な表情で俺は問いたです。幼女なのか？魔王なのか？どっちかにしてほしい。

「われはまおうなのだー！」

ほうほう、幼女ではなくまおうなのか。ってアホかー。

寒い一人ノリツツコミを提供してしまったことを読者に謝る。い

やいやそうじゃなくて、何で幼女が魔王なんだよ。何で魔王が幼女なんだよ。

「俺は勇者であって、魔王を倒しに来たんだよ。お前じゃない。それとも魔王に攫われたのか？ だったら、俺が家まで送り届けてやる」

するとどうだろう。自称魔王はその名に恥じる涙を流しやがったのさ。まったく、傑作だろ。

「うえーん、あたしがまおうなのー。せかいをきょうぶのどんぞこにおとしいれたまおうなのー！」

拜啓母上様、僕は世界を恐怖に陥れた魔王に泣きべそかかすことに成功しました。とりあえず泣き止ませたいのですが、どうしたらよいでしょう。

俺は魔王の玉座の前まで行くと、優しく頭を撫でてやった。鳴き声はちよこつと収まり、上目遣いで俺を見上げた。まおうのうわめづかい ゆうしゃに こうかはばつぐんだ！

「すまんすまん、君が魔王って考えづらくて」

ゆうしゃの べんかい！ しかし、こうかがないみたいだ……
「ぐすつ、ばかばかー」

ここ数年の内で一番驚いたのはいつか、と聞かれたら、俺は迷うことなく今日という日を挙げるだろう。読者の中に、突然幼女に抱きつかれて驚かない奴はあるだろうか。いたら俺のところに来なさい！ いや、来てください。

「おい、離せつてば！」

ゆうしゃの ていこう！ しかし、こうかがないみたいだ……
「やーだ、ゆうしゃあったかいんだもん」

まおうの あまえる！ ゆうしゃに こうかはばつぐんだ！
「あの、俺の冒険の目的は君を倒すことなんだけど、倒しちゃってもいいかな？」

読者が今までやってきたロールプレイングゲームで、魔王を倒す事に許可が必要なものはあったであろうか。あったら作者のところ

へ」一報ください。

「だーめ、ゆうしゃはあたしとあそぶの！」

「あの、それじゃこれ以上人間を困らせるのやめてくれる？」

「ゆうしゃがまおうのそばにいてくれるんらいいよ」

「だそうです。世界を救う為には俺の犠牲が不可欠なようです。そんな奴叩き斬れ？ そういうこと言うのは天使の笑顔を持つ幼女を斬ってからにしないさい。いや、やっぱりやめて。」

「そういうわけで、世界の平安の為に、俺は魔王様のそばにいなきやならんようです。嬉しいなんてこれっぽっちも思っていないんだからね！」

「わかった。それじゃ約束してくれ。二度と人間を困らせるのはやめるんだ」

「うん、わかった！」

俺はつくづく疑問に思う。こんな幼女がどうして人間を困らせるようなことをしたのか。恐らく、裏があるに違いない。俺はここに残り、魔王を裏で操っている奴を叩きのめすことに決めた。決して可愛い魔王と一緒に暮らしたいからではない。何度も言うが、決して可愛い魔王と一緒に暮らしたいからではない。

魔王たん

二話目にして真打登場

前回のあらすじ

不甲斐ない仲間により、魔王を倒しに魔王城へ単騎突入しに来た勇者（俺）。世界を恐怖のどん底へ陥れた魔王の正体は、なんとなんと可愛らしい幼女だった。世界の平穏と引き換えに魔王との同居を余儀なくされた勇者の運命や、いかに（勇者自信そのことは全然嬉しい事じゃない。読者にそれだけは分かってほしい）。

「じゃあ、あたしのおへやであそぼー！」

上目遣いで駄々をこねる魔王は、俺に多大な精神ダメージを与える。

「それじゃ、案内してくれ」

「こつちこつちー」

俺の手を引いて玉座のところからとことこ走り出す魔王。ほんとうに、どうしてこいつが人類を恐怖のどん底に陥れたのか疑問でしようがない。そんなに散らかしてないのに作者の部屋に現れるゴキブリの根源より気になる。

「なあ魔王、一つ聞いていいか」

「なーに？」

足を止め、俺の質問に耳を傾ける魔王。

「何で、人間を困らせるようなことをしたんだ？」

「それは……」

一瞬の沈黙の後、魔王は告げた。

「パパのしわざなの」

「パパ！？」

パパ。とーちゃん。ダディ。衝撃の事実である。どうやら諸悪の根源はこいつの父上様らしい。

「けど、パパはまおうのくらいをいんたいしたから、あたしがまお

うのくらいについたの」

「ほえー。で、お前のパパはどこにいるんだ？」

「あんないする！」

魔王は再び俺の手を取り、駆けていった。

「ま、魔王様！ そいつは！」

魔王城、広い廊下の途中、俺と魔王はモンスターに遭遇した。と
いっても、姿かたちは燕尾服を着た少し顔が良い普通の人間の青年
だった。切れ長の瞳にこげ茶色の長髪がどこか美しい。

モンスターと分かったのは、一つはこんなところに人間がいるわ
けないこと、もう一つは、奴の爪が有り得ない長さをしていたこと。
今までの冒険で得た知識が正しければ、きつとこいつは爪獣クロウ・モンスターの上
級種であろう。伸縮自在の爪は生半可な力では抵抗すら難しい。そ
ういや、いつかの荒野で出会った爪獣、強かったな。

そこで、俺は自分が勇者だったことを思い出す。こいつらにとっ
て、俺は殺戮者なのであった。

「このひとはゆうしやなんだよ！」

あの一、魔王さん？ いくら何でも魔王城で勇者の名前を口にす
るのはマズいんじゃないですかい？ あんたたちモンスターにとっ
て、俺は殺戮者なんじゃないですかい？

「くっ、多くの同胞の命を奪ってきた憎き勇者、貴様はここで殺す
！」

「ちょ、おまつ！」

ほらーっ、やっぱり。爪獣の青年はその鋭い爪で俺に襲い掛かっ
た。しかし、俺は数々の修羅場を潜り抜けてきた勇者である。これ
しきの奇襲を回避出来ないはずがない。はずがなかったのに

「ひでぶっ！！」

さすがは上級種。爪が俺の頭にヒットし、頭部から大量の鮮血が
溢れ出す。あ、これコメディイ小説だからそれ程大きく考えないで
もよいでござるよ？ それでも痛いことは痛い。

「おい、何するんだよ！」

「モンスターが勇者を襲って何が悪い。それに、魔王様に手を出す奴は俺が抹殺する」

確かに、モンスターが勇者を襲うのは真つ当である。というか、何か強いぞこの青年。例えるなら、序盤に出てくるレベル9のピジョンのような強さだ。ま、俺のピカチ〇ウで瞬殺だったかな。はっはっはっ。

「こら、レヴィー！」

と、ここで魔王が止める。さっすが魔王様です。というか、レヴィイという名前なのか。センスを感じ、俺は彼の名付け親の下に生まれたかっと思った。だって勇者って名づけられたんだよ、俺。生まれた頃から勇者になることを約束された名前じゃねーか。

「何故です魔王様、こいつは我等の敵です！」

「このひとはわるいゆうしやじゃないよ！」

悪い勇者じゃない。勇者という職業は正義という名の下に成り立っていると思っていたのに、そう言われると複雑な気分になるものである。

と、その時であった。

「まあまあ、そう怒ることもないだろう」

地の底から響いてきたかのようなその声は低く、言い知れぬ重圧を感じさせた。

「せ、先代！」

青年が振り向いた先に、一瞬にして一人の大男が姿を現した。

漆黒のマントを被り、頭には魔王と同じ様な角が生えている。年齢は、人間で言えば50歳ほどであろうか。

その男は俺の方を向き、再び低い声で言葉を紡ぎだした。

「君が勇者か？」

「え、ええ、そうですけど」

すると、魔王が言った。

「パー！」

何だってー。俺は驚きのあまり言葉に出す事が出来なかった。

一話目にして真打登場（後書き）

男キャラのAAなんてどうでもいいや

へ、今何と？ 聞き返す前に、レヴィが口を挟んだ。

「待って下さい先代！ こいつ、我等の敵である勇者ですよ！？ 隙をみて魔王様や先代の命を狙うつもりです！」

「いやいや、違う」と言えば嘘になるかもしれない。俺の目的は魔王を倒す事。可愛い幼女に油断していたが、いつ本来の目的を真剣に思い出すかわからないのである。

「よし、ならば」

次の瞬間、何が起こったと思う？ なーんと、俺の腰に提げてある10万Gもしたダイヤソードが粉々に砕けちまったのさ。こりや傑作だね。

「ああー！ ダイヤソードがあー！」

「もー、パパ。ゆうしゃがこわがっちゃうでしょ」

こりや傑作だね、などと地の文では吹かしていたが、やはりあれは大事な剣なのである。それが一瞬で砕かれた時の衝撃を、読者に伝わらないのが残念でたまらない。

と同時に、良質なダイヤモンドで出来た頑丈な剣を指一本動かさずに粉々にしてしまうラヴィオラさんに対して、もんの凄い恐怖感を抱いてしまったのである。こりや隙をみた奇襲も通じないね。

「脅すつもりは無いんだ。この剣のようになりたくなければ、この城に住んで娘の遊び相手になってはくれないだろうか？ そうすれば人を困らせるのもやめよう」

平然と矛盾事を口にするラヴィオラさんに対して、俺は更にもんの凄い恐怖感を抱いてしまったのである。ちょっとちょっと、このおじさん怖いよー。

「わ、わかりました、言う通りにします」

「やったー、ゆうしゃといっしょだー！」

言いながら、魔王は俺に抱きついた。ふっ、俺は自らの勇者という名前を捨てる代わりに、人類に平和をもたらした英雄になった。俺の名前は未代まで語り継がれるだろう。

自己満足に浸る俺に、ラヴィオラさんは言った。

「よく言ってくれた。では、君はゲストルームで生活しなさい。不自由はさせないよ」

「あ、ありがとうございます」

「ああ、それと、一人前の魔王になるには色々な教養が必要だ。各地を冒険して回った君なら、教育者として十分だろう。娘の教育者としても、働いてくれ」

「わ、わかりました」

はつきり言つて、魔王に何を教えればいいのか俺は皆目検討つかない。しかし、承諾しなきゃ殺されるかもわからんのである。変なことは教えたりしないから、誤解しないでほしい。

それから、俺の魔王城での生活が始まったのである。そして、ようやく1話から続いた回想が幕を閉じた。いやー、長い回想シーンでしたな。

サキュバスはウェイトレスの香り(前書き)

携帯じゃずれちやいます

サキユバスはウエイトレスの香り

「んっ……」

目を覚ますと、そこは一面の銀世界だった、とくれば名作を彷彿とさせるが、残念ながら俺の目の前にあるのは幼女の寝顔だった。フィーバーである。さっき残念とか言ったことに俺は平身低頭を惜しまない。

そおーつと、俺はそおーつと起き上がる。しつこいようだが、そおーつとだ。しかし、それでも起きてしまつもんである。俺は爽やかな朝を迎えられそうに無い。

「あれえー、ゆうしゃがそばにいるー」

眠い目を擦り擦り。少し乱れたパジャマを着込み、右手にはクマさんのぬいぐるみ。眠そうにしている寝起きの女の子というのは、完全に作者の個人的嗜好なのである。本当にすいませんでした。

「そばにいるじゃなくて、お前また夜中俺のベッドに潜り込んだな」「だってだって、ゆうしゃとねたいんだもーん」

「まったく……」

幼女とおねんねする文章をヘラヘラと笑いながら打ち込んでいる男が性犯罪者にならないか心配しながら、俺は高めのベッドを降りた。魔王も後に続く。

魔王の父親であるラヴィオラさんが用意してくれたゲストルームは、広くも無く狭くも無く、丁度良い広さだった。大きな窓からは陽光が差し込み、オシャレな朝を演出させる。更に、夜には満点の星空が臨めるのだ。

先程まで俺（と魔王）とぬいぐるみ（）が寝ていたベッドは良質な羽毛製で、今朝も安眠を提供してくれた。特に枕が良かったのであるう、前日の疲れは一切残っていない。

朝食を摂る為に、魔王と共に食堂へ向かう。ただっ広い通路には、数人の魔兵士が巡回していた。ここに来た頃は魔王と歩く俺を問答

無用で攻撃してきた奴等だが、もう既に一週間が経った。皆魔王の遊び相手兼教育者としての俺の顔を覚えてくれ、親しい仲にある。

食堂に着く。有り得ないほど横に長いテーブルは、初めて見た時には圧巻させられたものだ。そこでは夜警を終えたばかりらしい兵士が大勢で陽気に酒を飲んでいた。

そこから少し離れた二人用の席に、俺と魔王は座る。同時に、これまた魔物のウェイターが注文を取りに来る。魔王直属の食堂であるここでは、全ての料理が無料で楽しめるので、遠慮無く注文出来るのである。

魔王と俺がサンドイッチを頼むと、すぐに料理が運ばれてきた。先程とは違う、若い女性のウェイトレスで、背中に大きな翼を生やしていた。桃色の頭髮が印象的で、年は少し上だろう。それでも露出度の高い制服が似合っていた。って、何考えてるんだ俺。

「あれ？ 君って、もしかして人間？」

そういえば、見ない顔である。久方ぶりの戦闘の予感がした。それでも俺は、魔王を指差しながら出来る限りの愛想笑いを浮かべた。「ええ、少し前からこの子の教育者としてこの城にお世話になっている、勇者つていいいます」

「へえ、そうなんだあ」

そいつは運んできた料理をテーブルに並べると、どうしたと思う？ 俺に抱きついて、その豊かな胸を押し付けてきやがったのさ。うらやましいだろ、ハハツ。

肩に伝わるやわらかい感触が何とも心地よい……じゃなくて、突然のことに俺は慌てふためき、とりあえずその女性をふりほどいた。崩れそうになる顔を必死に取り繕いながら、言ってみるもんを言ってみる。

「びつくりした、何ですかいきなり」

「ごめんごめん、ついサキュバスとしての本性が」

その女性はあっけらかんと笑った。

サキュバス淫魔と聞いてピンとこない読者は少ないだろう。男を誘惑して精

気を奪うわるーい魔物である。しつこいようだが、わるーい魔物である。何としてもサキユバスを登場させたい作者の願望が、4話目にして叶った。桃色の頭髮というのはご愁傷様の某サキユバスを真似たんじゃない。断じて違う。

「ゆうしゃー、ごはんたべよ?」

二人分のサンドイツチを前に、不機嫌な様子で不満を述べる。ちやんと俺を待つことが出来るのは、さすが魔王といったところか。

「ごめんな。じゃ、いただきます」

「いただきます」

笑顔でサンドイツチを食らう魔王。口元にクリームをつけながら笑顔でケーキを食べる魔王も出す予定が無いわけではないので、作者と同じ趣味を持つ変態は期待してして下さい。

んー、職場放棄か? サキユバスさんは厨房に戻らない。サンドイツチを口に運ぶ俺を眺めている。

「あの」

「どうしたの?」

「厨房、戻らないんですか?」

「んー、勇者君が可愛いからもうちょっとここに居たい」

うんうん、やはりサキユバスといえばお姉さんキャラである……
つてちがーう。

「けど、やっぱり仕事に戻らなきゃだよね」

「頑張って下さいね」

こういう時こそ、笑顔である。戻り際に、彼女は俺に言った。

「あたしはロゼッタ。ロゼって呼んでね」

「はい、ロゼさん」

正直言って、サキユバスというものを甘く見ていた。今後起こる出来事を、誰が期待しようか。間違えた、誰が予想しようか。俺と魔王は朝食を食べた後、勉強する為に魔王の部屋へと向かったのである。

ドキドキお勉強たいむ(前書き)

タイトル「釣りでした」

ドキドキお勉強たいむ

授業内容がきちんと書き記されたノートや鉛筆などが散らばっている小さな勉強机にちよこんと座る魔王は、黙って俺の授業を聞いてくれるので助かる。黒板を走らせる白いチョークの音が魔王の勉強部屋に心地よく響くのもそのおかげである。鬼教師は気取れそうに無い。

ラヴィオラさんからは、社会的常識、外の世界の事などを教えるよう頼まれた。手前味噌ながら、俺は一人前の常識は理解しているつもりだし、外の世界のことは度重なる冒険で知り尽くしている。人に教えることも得意なので、魔王との授業は俺にとっても楽しみだった。

しかしラヴィオラさん、勇者の弱点などもあれば是非娘にご教授してくれ、というのはどうなのだろう。あんたまさか俺を狙ってるわけではあるまいな。

冒険者が使うアイテムなどの授業。チョークの手を止め、今までのががちゃんと理解できているかのテストだ。魔王よ、俺の問題に答えられるかな。

「よし、じゃ今までの所をテストするぞ」

「はい！」

いい返事です。では第一問。

「冒険初期の森などに多く自生する、即効性の回復力がある草の名前は？」

数秒を要し、魔王は元気に解答する。

「やくそう、でしょ」

正解。魔王、でしょはいらないぞ。

「その通り。傷ついた奴がいたら、戦闘中でも使わせてやるんだぞ」
余計なことを言いつつ、次の問題。

「魔力の回復に効果のある草の名前は？」

「えっと、精霊草だよね」

「こらこら、お前は平仮名で喋る設定なんだってば！ 正解だけど、以後気をつけなさい。」

その後も魔王は正答を重ねる。物覚えがいいことは嬉しいのであるが、『わかんないよおにいちちゃん』とちよつとくらい頼ってきてほしいものである。いや、失敬。

俺が出した問題を、魔王は全問正解した。やるじゃないか魔王さんよ。

「よし、今日はここまで。復習を怠るなよ」

「ありがとうございます！」

魔王はぺこりと頭を下げた直後、俺のところへ駆け寄った。

「ゆうしゃ、あそんでー」

笑顔でそう言うと同時に、休み時間へと突入だ。俺は鬼教師(?)から、優しいお兄さん(?)へと変身する。さつきからクエスチヨンマーク入れてる奴出て来い。

「んじゃあ、何して遊ぼうか」

「んとね、しりとりしたい！」

「しりとりかー。じゃ俺からな」

「まけないよー」

「じゃあまずは『リンゴ』」

「えっとー、えっとー、『ウェブアプリケーションサーバ』」

ウェブアプリケーションサーバ。ユーザからの要求を受け付けて、データベースなどの業務システムの処理に橋渡しする機能を持ったサーバソフトウェアのことである。IT用語をしりとりを持ってくるとは、やるな魔王。

「『バス』」

「『スペキュレーションとりひき』」

スペキュレーション取引。売買行為を通じて、キャピタルゲイン

(有価証券、土地等の資産の価格変動に伴って生じる売買差益)の取得を目的とした取引のことである。IT用語の次は証券用語ときました。

「『キリギリス』」

「す、す、『スーパー』」

ようやく子供らしい単語が来た……と私は思いました。

「G3ファクシミリ」

スーパーG3ファクシミリ。ITU-TS(国際電気通信連合・電気通信標準化セクタ)が標準化したFAXの国際規格の一つで、アナログ電話回線用のもの。A4判原稿を1枚を最短で約3秒で伝送可能なファクシミリなのだが、これまたIT用語なのである。

「あのさ、『魔王』」

「なーに？」

「そんな言葉、どこで覚えてくるの？」

「じょうしきだよー」

常識、か。俺はこの子に常識を教えることが出来るか心配になってきた。一方作者は、一人歩きするキャラクターを今後も平仮名喋りさせてよいものか悩むのであった。

飛ばして読んでも何の問題も無い回

夜

窓からは満点の星空が望める夜のゲストルーム。俺はベッドで横になっていた。あつたかい布団に包まると、今日の疲れが抜ける。対して疲れているわけではないのだが、ふかふかのベッドに潜ると疲労が抜けていくあの心地よい感覚が味わえた。ほんとに疲れてるわけじゃないのにな。

今日はよく眠れそうだな。俺は目を閉じ、夢の世界へ飛び立とうとしていた。あ、魔王が来た時の為にちょっとスペース空けておいたほうがよいだろうか。って、何考えてるんだ俺。

一応、とりあえず何となく、ただ広いだけという理由で、俺はベツドの隅に体を寄せた。

その時、ドアが開く音がしたのだ。まーた魔王が来たか。まったくくしょーがねー奴である。

だが、廊下の明かりに照らされたその影は少し大きい。それに、背中には翼のシルエット。まさかあんな

「やほー、勇者君。起きてるよね」

高く甘美な声の主は、やはりサキユバスの口ゼさんだった。

サキユバスの夜這い。このシチュエーションに萌えぬ男は作者だけではないでしょう。実は作者の部屋にもよくサキユバスがやって来て困っている

どばーしゃん

失敬。今のは長々と喋る作者を殴り飛ばした音である。お前は黙って文章を打ち込んでいればいいのだよ。わかったか、どあほう。

「あの、口ゼさんですよね？ 何の用ですか？」

クスクスと笑いながら、一瞬のうちに彼女は俺のベッドに入り込んできた。あー、くそつ。何でシングルじゃなくてセミダブルを置くんだよ。

「もー、勇者君ったら。わかってるくせに」と、ロゼさんは俺に密着して頬擦りする。

「夜這いのつもり……ですか？」

「ご名答です」

「ごめんなさい、俺はまだ死にたくないんです」

「えー、大丈夫だよ。精気を吸わなきゃいいんですよ？ 精気を吸わないでの行為も可能なんだよ」

「そういう問題じゃないでしょう」

「何でだめなの？」

「だって、ねえ。これ子供も読んでもかもしれないし。それ以前に、作者が中学生ちゅうがくせいなんだから」

「いーじゃん？ 気の利いた作者が地の文を一切書いてないし」

「手抜きなんですよ？ そうに決まっています」

「問答無用よ。それー」

「うぎゃあああ！」

厚かましいようですが、続きます

「ん、んぐっ…んっ」ゴクゴクッ

「いっぱい出たわね」

「はあ、はあ…」

「今度は、あたしの胸で挟んでみようかしら」

「うわぁっ！ ロゼさん、そんなの見せないでっ」

「あらあら、こっぴつのは嫌い？」

「だ、大好きです…」

「よく言えました」スッ

「うぁぁっ！ ロゼさんの胸に、俺のが挟まれてる」

「これだけじゃ、満足できないでしょ」パクッ

「ま、また口ですか……っ」

「じつすねば、二倍気持ちいいでしょ」

「き、気持ちいいですっ……」

「あぁっ、ロゼさんっ!」

「うふっ、出す前に二人で気持ちよくなりましょうか」スルッ

「ろ、ロゼさんの……」

「わかる? ココに入れるのよ」くぱぁ

「い、いいんですか…?」

「ええ。一緒に気持ちよくなりましょ」

「い、いきますよ」ズッ

「あぁんっ！ 勇者君のが、入ってる！」

「ロゼさんの中、あったかいですっ」

「もっと、もっと突いてえ」

「ロゼさん……っ」

「あ、あたし、イクっ」

「俺も、出そっですっ」

「一緒にイキましょ、勇者君」

「ロゼさん、ああっ っ！」

「あっ、あっ、はぁぁぁん」

ガバツ

勇者「なんだ夢か」

飛ばして読んでも何の問題も無い回（後書き）

地の文を一切入れてないから……セーフだと思います。

×看病 ○姦病

熱っぽい。

うーむ。単に熱っぽいと言えない。得に喉の痛みや頭痛がひどい
つたらありやしない。すまん魔王、今日はゆっくり寝たい。授業も
遊び相手も出来そうにない。

窓から射し込む朝の陽射しに痛さすら感じながら、俺は二度寝を
決め込む。けど、来ちゃうんだよなあの子は。ほら、扉を開けて

「ゆづしやー」

来たよ魔王さん。

「すまん魔王、今日ちよつと熱あるみたいなんだ。悪いが、今日は
ゆっくり寝かせてくれ」

すると魔王は明らかに心配した様子で、俺のベッドの前へと駆け
寄った。おもむろに額を触ると、その熱さに驚いたのか、動揺の色
を含めた顔で言った。

「すごいねつだよゆづしや！ かんびょうしてあげる」

何とありがたいことであろうか。けど、熱を下げるのには寝ることが一番なのである。

「ありがとう魔王、気持ちだけでじゅうぶ」

「まっててね！」

あらら、魔王は走り去っていった。

一時間ほど眠っていたであろうか。俺は何かの物音に目が覚めた。

ふと見遣ると、魔王が何かやっている。カチャカチャといった金属音もセツトだ。

「魔王？」

「あ、おきたんだねゆうしゃ」

はつきりとした意識で見ると、テーブルに一皿の料理が置かれていた。

うーん、きつと料理なのだろうが、何かがおかしい。異様な赤色を放っており、それに臭う。湯気が立っているが、そのせいなのか全く中身が判断できない。

「魔王、これ何だ？」

「ゆうしゃがげんきになるようにつくったおかゆだよ」

ほうほうお粥。俺が元気になるように、か。確かにそう言われてみると、その赤は一口食べただけでスタミナが沸いてきそうな色である。また匂いの方も、健康的な良い匂いだ。うん、自己暗示の力ってすごい。

「はい、のこさずたべてね」

笑顔でスプーンを渡される。よし、全部食べちゃうぞー！

「それじゃ、いただきます」

そして、一口分を口に運ぶ。

「うぼげらあっ！」

読者の方々にこの素晴らしい味が伝わらないのが残念でしょうがない。口の中に入れた途端に広がる濃厚な味わい。程よい辛さと野菜の甘さの調和で生まれるハーモニー。魔王、すまんが不味い。いや、不味いどころの問題ではない。殺す気だよこの子は。

風邪気味の俺の腹に投入された核弾頭は、胃壁に触れた瞬間、アインシュタインもびっくりの超新星大爆発を起こした。

そんなことがあって、俺の意識は虚空の闇へと飛んだのだった。

てへっ！ 誘拐されちゃいました

レヴィ。

立派な爪を持った爪獣の上級種である。本人は俺がいつ魔王に危害を加えるか心配なようで、常に俺のことを毛嫌いしている。それでも彼は、魔王のことを何より心配する良い奴なのである。

故に、朝起きた俺の枕もとに置いてあった『魔王は預かっている。返してほしければゴーレム山の隠れ洞窟へ来い』などという脅迫文を見せたら、そりゃもう半乱狂状態になるのである。

「魔王様ー！！ 今助けに行きますぞー！！！」

半乱狂なんて言葉は生温かった。全乱狂で叫びながら、レヴィはその爪を研ぎ、ゴーレム山へ向かおうとしていた。俺はそれを必死で止める。

「落ち着けレヴィ。下手に相手を刺激したら魔王に何かあるかわからないぞ。ラヴィオラさんの指示を待とう」

「そんな悠長なことをしている暇など無い！ 魔王様に何かがあれば、俺は……！」

とその時、部屋の扉が音を立てて開いた。部屋に入ってきたのは、やはりいつもと変わらぬ威風を放ったラヴィオラさんだった。

「どうしたんだ、騒がしいな」

「それがですね」

俺はラヴィオラさんに殊を説明した。

「ふーむ」

俺が話し終わると、ラヴィオラさんは神妙な表情になる。いつもは大らかに笑う彼だが、やはり娘が攫われたのだ。笑って済む問題では無い。笑って済む問題では無いのに、だ。

「がっはっは、面白いわい」

高らかに笑うラヴィオラさん。おいおいおい、娘が誘拐されたんだぞあんた！？ さすがにマズいだろう。そしてレヴィは当然のように怒り出す。

「笑ってる場合じゃありません先代様！ 今すぐ精鋭達を選びすぐった部隊をゴーレム山に向かわせましょう！」

「まあ待て。下手に相手を刺激するのは良くない。軍や部隊を向かわせるのは下作だ」

さすがラヴィオラさんである。なかなか的確な指摘に、レヴィも少しばかり黙った。

「そうだな。お前達、二人で魔王を助けに行ってくれないか」

「コ、コイツとですか！？」

人差し指で俺を指しながら言う。失礼な奴だ、一応俺だって勇者

である。剣の腕前なら覚えはあるのだぞ。

「うむ。で、勇者君にその気はあるか、」

ふっ、ラヴィオラさんよ。魔王は俺がいなきゃ一人で何も出来な
いんだぞ。

「もちろん行きますよ」

「心強い。では、頼んだぞ」

するとレヴィはいかにも不服そうにラヴィオラさんに意見する。

「待つて下さい！ 俺一人で魔王様を助けにいきます」

そんな彼に対し、ラヴィオラさんは幼子を諭すような口調で言っ
た。

「一人より、二人だ。期待しているぞ」

「何故こいつと……」

そして、勇者と爪獣という何とも異様なパーティーが、魔王救出
作戦に出向いたのであった。これ、続きますぞ。

てへっ！ 誘拐されちゃいました（後書き）

最近執筆速度が上がってきてます。調子良いです。週一更新に喘いでいた過去の自分が情けない！ ってくらい調子に乗ると共に、やっぱり調子に乗っています。

ゴーレムを幼女化する妄想を楽しむお話。(前書き)

タイトル「嘘です」

ゴーレムを幼女化する妄想を楽しむお話

そんなわけで、俺とレヴィはゴーレム山の麓にいる。

ゴーレム山。そこは危険なところである。名の通り、野生のゴーレムが出現する山だ。

ゴーレムは気性が荒く、人間だろうが魔物だろうが見境無く攻撃する奴だ。体も大きく硬く、防御力が比較的高い。

しかし、俺やレヴィがそれほど恐れる相手ではない。ゴーレム山は俺が冒険中期に通ったところである。その頃と比べれば、俺は少なからず強くなっている。レヴィも上級種なので、ゴーレムにやられることはあるまい。

「ゴーレムは強い。帰るのは今のうちだぞ」

見下すような口調で言うレヴィに、俺は鼻で笑った。

「俺のことは心配するな。それより、自分の身を心配するんだな」

俺はラヴィオラさんから借りた剣が収められた鞘に手を当てた。

「ふんっ、余裕こいてろ」

何だとおいこら。俺はちょっとばかり怒ったが、今からそれじゃ先が思いやられるというもの。腹の奥に気持ちを押し込むと、俺とレヴィは山へと入っていった。

瞬間でした。

どしゃん！

そりゃあびつくりしたよー。入ってすぐにゴーレムの奇襲があったんだもん。

俺の眼前に振り下ろされた豪腕。濛々と上がる土煙が晴れると、そこには一匹の巨大ゴーレムがいた。

土色の肌也太い腕。自分より一回り大きい体。ゴーレム山には下級種がほとんどだと思いついていたが、おそらくコイツは中級種だ。

それでも俺が恐れる相手ではない。鞘から長剣を引き抜く。ゴーレムの間合いまで走ると、胴体に剣の切っ先を思い切り突き刺した。さすがラヴィオラさんがくれた剣である。一撃で中級種を倒す事に成功した。胴体から崩れていったゴーレムは、砂になって地面に吸収された。

「っふう、あぶねっ」

またいつ奇襲があるかわからないので、長剣を鞘に収めるのはやめておいた。

「やるな」とレヴィ。

「お前も気を付けろよ」と俺。

「俺の爪に貫けないものは無い」とレヴィ。

「頼もしいな」と俺。

「よしっ、早く洞窟を目指すぞ」とレヴィ。

俺とレヴィは、魔王が囚われている洞窟へと急いだ。

ゴーレムを幼女化する妄想を楽しむお話。(後書き)

ようこそ、ブルーですよね

飛ばして読んでも……やっぱり問題ありません

まずいぞ。

いやね、囲まれちゃったんですよ。そりゃもう大勢に。大勢のゴーレムに囲まれちゃったのですよ。ほとんど下級種なだけどね。けどそりゃ凄いや。ざっと30はいるな。経緯？ 悪いが省く。じりじりと近づくゴーレムだが、俺やレヴィが恐れることはない。前言撤回。レヴィが恐れることはない。

鋭く研がれた硬い爪を光らせながら、レヴィは突撃していった。同時に、ゴーレム達が一斉に動き出した。

「おい！ 独断で動くな！」

「うるさい！ 自ら切り開かねば道は無い！」

なーんて戦闘中に名言をほざきやがるレヴィ。しかし、その戦闘センスは思った以上だった。四方から来るゴーレムの豪腕を無駄の無い紙一重の動きで避けながら、爪をゴーレムの胴体に突き刺す。そうやって着実にゴーレムの数を減らしていった。

俺も負けてはいられない。俺にも襲い来るゴーレム達を、自慢の長剣さばきでバツバツと倒していく。フハハハハ、どうだゴーレム達よ。

と、その時であった。

「ぐあはっ！」

レヴィの叫び声にそこを見ると、レヴィが蹲っていた。後方からの攻撃が背中直撃してしまった様子である。俺はレヴィを助ける為、奴を取り囲むゴーレムを倒した。レヴィを庇いながらで挺子摺ていすったが、ある程度倒すと、気を失ったレヴィを背負ってその場から走り出した。

ゴーレムの気配が無い安全な岩場で、背中に傷を負ったレヴィを横たえた。

「くそつ、何故助けた！」

動けない体で俺に悪態を突くレヴィ。それだけの元気があれば、すぐ動けるようになるのだろうな。

「お前が危なかったからだろうが」

「貴様に助けられずとも、あんな奴等手負いの俺で充分だった」

そんな強いことを言いながらも、レヴィは背中の痛みに耐え切れずに苦しそうな呻き声を出す。背中を手で抑えながら、顔をゆがめた。

「ほら、お前はここで休んでいる。洞窟へは俺一人でいくから」

「くつ、貴様一人でいかせられるか」

「何だ、何でそんなに俺のことが気に入らないんだ？」

「お前が気に入らないんじゃない」

「じゃあ、どうして」

躊躇いがちに、レヴィは言った。

「お前と、離れたくない……」

潤んだ大きな瞳の上目遣いで、俺の顔を覗く。

普段見ないレヴィの表情に、俺は不思議な感情を覚えた。

「なっ……！？」

呆然とする俺に構わず、レヴィは言葉を繰る。

「好きなんだ、勇者……」

甘い声で囁かれると、俺も気を許してしまいそうになる。

「お前……」

「勇者……っ」

突然、俺の身体に抱きついた。

長い手が俺を抱きしめ、レヴィの体温が間近に感じる。

美しく細い手が、俺に絡められた。

「わっ、レヴィっ」

突然のことに俺はレヴィとの距離を置こうとする。しかし

「もう少し、こうしていたい」

「レヴィ……」

「初めて会った時から、好きだった……勇者」

俺は、言葉を発することが出来なかった。

魔王との事などであれだけいみじくもみ合っていたのに、目の前の彼は確かに「好き」と、そう言っている。

だが、慌てて撤回するように、レヴィは続けた。

「すまん、気持ち悪いだろうな。許してくれ」

顔を逸らすレヴィに、俺はどうしてだか……一瞬の愛らしさというものを見出してしまったらしい。

「……しょうがねえな」

「勇者……？」

「喋るな、傷が痛むぞ」

そのまま、レヴィと唇を重ねる。

「んっ……」

驚いた表情だったが、レヴィは自ら舌を絡めてきた。

混ざり合う、俺とレヴィの唾液。

暖かく……どこか甘い蜜の味がした。

やがて俺の方から唇を離すと、レヴィはもじもじしながら、紅く染まった頬を隠すように言った。

「あたたかかったぞ、勇者……」

そんなレヴィに、俺はからかうように言ってみる。

「そりゃどうも、お姫様」

「なっ……！」

怒ったような、喜んでるような、複雑な表情を見せた。

「どうした？ お・ひ・め・さ・ま」

「う、うるさいうるさい！ 俺を愚弄するな！」

どうやら、怒っているらしい。が、俺がそんなことを気にする義理なんてあるまい。

「ははっ、その元気があればもう大丈夫だな。よし、行くぞ」

威勢良く俺が言うと、レヴィは顔を背けた。

「……………今日のこととは、早く忘れる」

「忘れねーよ、お姫様」

「か、勝手にしろっ……………」

ガバッ

勇者「なんだ夢か」

飛ばして読んでも……やっぱり問題ありません(後書き)

地の文を最小限に抑えたから……セーフだと思います

そんなこんなで、俺達は魔王が囚われている洞窟に辿り着いた。途中、様々なトラップが待ち受けていた。深さ50センチほどの落とし穴や、糞尿を敷き詰めた滑る床。それらを華麗にスルーして、俺達は洞窟の最奥部の広場まで行き着いた。天井から光が差し込んでいる。やあ、長い道のりでしたね。

そこには、縄で縛られ拷問を受けている魔王の姿が なんていうものは無く、柱にもたれかかりながら幸せそうに眠っている魔王がいた。とりあえず縄で縛られているのだが……っておい、縄で縛られてる幼女を想像して息を荒げている作者を誰でもいいから何とかしてくれ。

「魔王様、お助けに参りましたぞ！」

「待て！ レヴィー！」

俺の制止も虚しく、レヴィーは魔王のところへ駆け寄った。その時だった。

「フハハハハ、それ以上動くも魔王の命は無いですぞ！」

突然魔王の傍に現れたのは、一人の狂戦士^{バースカー}だった。バースカーには珍しい少女で、長い青色の髪が印象的だ。恐らく上級種だろう。激しい戦闘が予想された。

「あたしはゼフィランセス。気軽にゼフィって呼んでね」

やたらとフレンドリーなゼフィは、手の代わりに右腕に生やした桃○白よろしくのナイフを、魔王の首元に突きつけた。魔王の命が危ない！ レヴィー、何とかしてくれ！

「魔王様から離れる！」

よしっ、俺の願いが通じたぞ。と思っただけど

「誰が敵の言うことなど聞くか！」

「ごもつともです。」

「な、何が目的だ！」

「何も言わずにあたしと戦いなさい！」

ふふふ、ここで俺は一計を案じた。戦いの間に、俺かレヴィのどちらかが魔王をこっそり救出しちまおう。まずは、戦いを承諾せねば。

「わかった。お前に勝てば、魔王を返してくれるんだな」

「言つとくけど、あの子を縛ってる縄はあたしが操っている特殊な縄よ。戦いの間にこっそり助けようなんて思えば、あの子を絞め殺すわよ」

くそっ、俺の作戦が……。何て恐ろしい縄だ。っておい、誰か女王様キャラに硬い縄で縛られる想像をして息を荒げているヘンタイを何とかしてくれ。

「貴様など、俺の爪で切り刻んでやる」

レヴィがキラリと光る爪を見せ付けた。あれ、今ゼフィさん震えたように見えたんだが、気のせいか？ いや、気のせいだな。戦いを何より愛する狂戦士がそれを恐れるわけないのだから。

「っ、っ、強がり言っつてられるのも今のうちだぞ！ 引き返すなら今のうちだぞ！」

あちらさんも同様にナイフを光らせる。言つとくが、自分の意志で光らせてるわけじゃないんだぞ。光を反射させてるんだぞ。本当だぞ。

「いくぞ！」

レヴィはその長い爪で連続的な突きを繰り出す。左右の手で休み無く繰り出されるそれは、華麗な演舞のようにも見えた。強いぞレヴィ。頑張れレヴィ。あわよくば、お前だけで奴を倒してくれ！俺は傍観してるから！

ところで、こいつは何で台詞の頭を重ねるのだろう。あ、わかった。きつとツンデレキャラなんだな。台詞の頭を重ねて、最後を『っ!』で終わらせるとツンデレになるのは周知の事実なのであった。例を出してみよう。

『た、たわらまちっ!』。どうだろう、これで見事なツンデレなサ○ダ記念日の出来上がりだ。

って、いかんぞ。無駄なツンデレクチャーのせいで無駄に長くなってしまった。こりゃあ次話に持ち越さなければいけませんな。いやあ、まいったまいった(わ、話数稼ぎしてるわけじゃないんだからねっ!-)。

萌え始めた狂戦士の恋芽

爪とナイフがぶつかる度に、ガキンガキンといった金属音が生まれる。いやはや、なかなか火花散る良い戦いだ。本当に火花散ってるんだけどね。

横薙ぎに繰り出されたゼフィのナイフを、レヴィは爪ではじく。突き出されたレヴィの爪を、ゼフィはヒラリと身体をひねって避ける。

「やるじゃないか」

「お前もな」

誰が何を言ったのか、読者にはチンプンカンプンだろう。しかし、それは仕方ない。作者だって同じである。口調が同じだと危険だなあ。

「だが、これで最後だ！」

今まで突きでの攻撃しかしていなかったレヴィは、右手の爪で横に薙ぐ攻撃を行った。予想外の攻撃には、さすがのゼフィも避けることが出来なかった。

爪の側面が横腹にフィット……間違えた、ヒットだった。横腹にヒットした爪は、ゼフィを吹っ飛ばした。ゼフィは岩壁に激突し、土煙を上げた。

土煙が晴れると、ゼフィが血を吐いて気絶していた。爪獣の驚異は爪の先端なので、致命傷には至っていないようだ。だが、もう奴は戦えないだろう。

しかし、それでもレヴィは止めをさす。魔王を攫った奴を見逃すとは思えない。手負いの俺が何を言っても、レヴィが爪を光らせるのは目に見えていた。倒れているゼフィのもとに、レヴィは歩み寄る。

「レヴィ、奴はもう動けない。止めをさす必要は無いだろ。魔王をつれて帰るぞ」

「お前は黙れ」

冷たく言い放つと、爪を振りかざした。俺は目を背けようとはしない。勇者である俺は、星の数ほどのモンスターを殺してきた。対象が女だからといって目を背けるのは、自分が許さなかった。

「魔王様を攫った罪、死を以って償え！」

確実に絶命する首元を狙った。と、その時である。

「そこまでだ、レヴィ！」

言ったのは俺では無い。声のする方　最奥部の入り口　を見遣ると、そこには一人の男が立っていた。威風を放つその大男を見た瞬間、レヴィは攻撃の手を引つ込めた。

「先代！」

そう、先代ことラヴィオラさんであった。何故あんたがここに！？俺とレヴィを一瞥した彼は、ゆっくりと、倒れているゼフィに歩み寄った。ゼフィに合わせて中腰になると、そつと右手のひらを彼女へ向けた。

聞いた事の無いような難解な呪文を唱えると、苦しそうなゼフィの表情がほんの一瞬で良くなった。閉じられていた目は、すぐに開けられた。

「んんっ……痛いよう」

起きたばかりの目をこすりこすり。はっきりしない意識のゼフィは、未だ痛むらしい右手を抑えながら辺りを見渡した。右見て、左見て　そして眼前のレヴィを見るなり

「ふえええん！　ごめんなさい！　許して下さいいいい！」

「え、あ、！？」

そりゃレヴィさんも驚くでしょう。突然泣き出しながらレヴィに許しを乞うゼフィからは、戦いを愛する狂戦士の感じが一切しなかった。

「安心しろゼフィランスス」

ゼフィをなだめたラヴィオラさんは、俺達の方へと向き直った。彼が何か言う前に、レヴィが言った。

「先代様、何故ここに!？」

「黙っててすまなかつたな。今から説明する」

ゼフィを見遣りながら、ラヴィオラは続ける。

「娘誘拐の目的はな、彼女の入城試験の為だ。」

先日、彼女が我が城に勤めたいという理由で城門を叩いたんだ。

ただ普通に入城させるのもつまらるので、我が娘を誘拐して、救助隊を撃退することが出来たらここで働かせてやる、という条件を提示してな。それで結果は

「うう……」

おいおいラヴィオラさん、あんたまさか、涙を湛えた上目遣いで懇願する女の子の願いを払い下げのような外道な真似はしねーよなあ（入城試験の為だけに娘を誘拐させる外道っぷりについては触れないこととする）。

「勇者を一撃で倒したその功績を称えて、精鋭部隊の一人として城で働くことを許可しよう」

見てたのかよ!

そんなわけで、また一人愉快的仲間が増えました。

その後色々あつて無事に城へと帰還した俺達は、けっこうな歓迎を受けた。

魔王が攫われたということは城中に伝わってしまったらしく、それに乗せ真相を知る者が誰一人といなかったため、パニックだったらしい。

そんな中、元気に帰ってきた魔王を見た城の者達は安心し、魔王やラヴィオラさんなどの大御所も交えた祝宴が大食堂で開かれた。もちろん、ゼフィも同席している。

「あ、あの、勇者さん……魔王様を攫ったあたしがこんな宴会に同

席してもよいのでしょうか？」

オドオドした様子で、俺の隣に座るゼファイが聞いてきた。

確かに、彼女が恐れるのも無理は無い。彼女は魔王誘拐の犯人。それが仕組まれていた事件でも、彼女は少なからず責任を感じていたのだから。

「心配するな、黙っていれば問題無いだろう」

「そ、そうですね」

ふむ、やはり先輩面出来るとはよいものだ。何の躊躇いも無く夕メ口をきけるのは、少し良い気分である。もっとも、レヴィなどにもそうだが。

俺とゼファイは目の前に並べられた食事に手をつけ始めた。ナイフとフォークを使うんだけど、右腕が武器となっているゼファイは自らのナイフで切り分けをしゃがった。あなどれんぞ、こいつ。

その後もみんなでわいわい楽しく酒を飲みながら、どんどん運ばれてくる料理をかつ喰らった。ある時、一人の巡回警備兵の男が言った。

「おい、誰だあの可愛い子？」

ゼファイが指差される。皆が注目する中で、新入りの彼女は自己紹介しようとした。しようとしたのにさ

「このひとがまおうをゆうかいしたんだよー！」

魔王の言葉に、場の空気が一瞬凍った。

魔兵士A「え？　おい、あいつが魔王様を誘拐したのか？」

魔兵士B「おいおい、何でそんな奴と一緒に宴会してんだ？」

魔兵士C「無いだろ？　ええ！？」

魔兵士D「こいつが魔王様を？」

ざわめく大食堂。屈強な兵士達のとる行動といえば、一つだった。

ら食事を再開した。魔王に変な行為を見せるんじゃないぞ、と俺は心の中で釘を刺したのだった。

○ゼフィたん
×はにゆうたん

1	i		i	/	r	-	¥
、	、	1	1	—	1	1	/
—	/	1	—	i		1	1
			.	i	/	1	1
			—	¥	、	<	、
/	/	/	八		1	1	1
/			、	、	/	1	、
				i	/	>	、
/	—	—	、	1	、	、	+
—	—	—	1	1	、	1	、
1	1	1	1	/	、	1	!
—	1	1	1	i	/	1	/
			—		、	1	/
						リ	二

i will give you all my love (前書き)

クロスケの歌の一節に出てきた言葉をタイトルにしたんですが・・・
あれの意味って何なのでしょいか

i will give you all my love

その後レヴィとゼフィに何があったかなんてこと、俺が知る由も無いが、レヴィが無理矢理ゼフィに部屋へと押し込まれたところまで見た。以前もそうだったが、何でこの作品の男は弱いんだ？ まあいいか。

今まではキャラクターを増やすのに精一杯だったからな。今後はタイトルにある『平和な魔王城』をどんどん盛り込んでいこう。

しかし、微妙だなあ……。14話も頑張っているのに名のあるキャラクターがまだ6人か。最低10人は欲しいのだが、どうしたことが。

ここまで戯言

「ゆうしゃー」

忙しく後片付けをする者達を脇目に紅茶を啜っている俺に話し掛けてきたのは、やはり魔王であった。

純白のドレスを白桜のように舞い上がらせながら、俺に抱きついてくる魔王。頭に生えている白くて可愛い猫耳。角をヒラヒラ(?)させながら抱きつかれると、何だか先端が刺さりそうで怖い。そんなことを表情に出さず、俺は優しいお兄さんになりきってみせる。

「どうした魔王」

笑顔を造ると、魔王も頬を綻ばせた。

「きょう、いつしよにねよ?」

おずおずと上目遣いで聞く魔王。ダメなわけないだろ。と返そつとしたが、

「お前は……いつも一緒に寝てるだろ」

俺が魔王の頭を撫でながら言つと、魔王は頬を膨らませた。

「きょうもいつしよにねたいの」
「ふふ、それじゃ一緒に寝ような」

そんなわけで、俺は今魔王を寝かしつけている最中である。金色に輝く月明かりの前では、ランプの微弱な明かりは不要。俺の部屋は、月明かりと静寂が支配する部屋になっていた。

「魔王……」
目の前の魔王の寝顔、やはり可愛い。
「ゆうしゃ、ナデナデしてー」

その言葉に、俺は魔王の頭を撫でる。柔らかい金髪感触が心地良い。

魔王はご機嫌になった様子で、にっこりと笑う。

月明かりにのみ優しく照らされた魔王。血色の良い弾力のある柔らかな頬に、俺は少しの躊躇いが含まれた口付けをした。

やはり、頬が暖かい。
びっくりした様子で、魔王は俺の方を見る。

「ごめんな、魔王。さ、早く寝よう」

「いまの、もっかいして？」

「……」

今度は、唇同士のキス。

魔王の頬に、更に赤みが差す。

数秒ほどで離すと、躊躇いがちな上目遣いの瞳を、魔王はゆっくりと閉じた。

「おやすみ、魔王」

「おやすみー」

俺の背中に回された細い腕は、しばらくほどかれそうになかった。

僕は調子が悪いとみんな受けに見えるんだ

城は周囲を取り巻く森から突き出す険峻な丘の上に建てられており、一番高い所にあるラヴィオラの部屋からは、世界を一望することができるといったような絶景が望める。乳白色を基調とし、屋根に瑠璃の色を配された城は、直線的で壮大な城壁と丸みを帯びた複数の塔が組み合わされ、森を威圧するように構築されている。

左右対称に突き出た巨杭には、数幾の黒い鉄棒が並べられていた。城門である。巨杭と巨杭の間は1kmほどもあり、高密度で鉄棒が並んでいる。

内側にある中庭は、緑で固められた地面。柔らかく短い若草が敷き詰められ、中庭なのに広大な草原を彷彿とさせる。寝転がれば、さぞ気持ちよさそうである。

そんな平和な魔王城だが、今日は何だか騒がしい。原因は中庭の中心で多人数の兵士相手に素早い動きで身の丈を越す大きな木槍を振るう一人の男にあった。

魔王を討伐に来た同士なのだろうか。いつだったか、俺も初めて魔王城に来た時にこんな歓迎を受けたことを思い出した。魔王士の攻撃を避けながら攻撃を繰り返すその姿に、俺は知らぬうちに昔の自分を重ねていた。

窓から観察していたが、なかなかやり手である。もう少し見てみようかと思っただが、それは突然開けられたゲストルームの扉に阻まれた。

「おい勇者、お前も中庭に來い！ 侵入者だ！」

「慌てるな、今行く予定だ。それよりも少し声の音量を下げろ。魔王が起きちゃう」

兵士が去るのを確認すると、俺は寝巻きの上から簡単な鎧をつけた。ラヴィオラさんから貰った長剣を腰に提げる。

よし、中庭へ向かうとしよう。魔王を起こさないように、忍び足

で部屋を出て中庭へ向かった。

木の槍なので致命傷には至ってないが、その圧倒的な攻撃力で次々と失神者の山が中庭の戦闘スペースに出来ていた。奴の槍さばきは衰えておらず、むしろ速さが増していた。

「次は君かい？」

侮辱と挑戦の意を込めてから、俺に向かって言った。

「そこまでにしろ、ナイト」

「その声、まさか勇者なのか!？」

驚いた様子で俺を見る。そうです、俺が勇者です。

男は、槍を地面に置き、兜を脱ぐ。現れた端整な顔立ちは、やはり以前共に冒険をしていたけど本当は敵のスパイの騎士^{ナイト}だった(一話参照)。

「久しぶりだなー、元気してたか？」

「全く、裏切り者が何を言うか」

嫌味を言ってみる。すると、そいつは顔色を変えずに俺に人差し指を突きつけた。

「おいおい、じゃあお前は何なんだ？ 何でここにいるんだ？」

うっ、そういえば俺も人のことを言えないのだった。勇者の立場から魔王の配下についた俺も、充分裏切り者を名乗るに相応しいのかもしれないな。

「色んな事情でここで働いている」

「うおいマジかよ!？ 何で勇者のお前が魔王城なんかで働いてるんだ？」

「カクカクシカジカあつてだな……」

そのカクカクシカジカを言葉を選びながら、ナイトに説明した。何故か俺は魔王^{ようじよ}に好かれ、以降魔王の周りの世話をする者としてこの城で働いているでござるよ。ござるよござるよ。

全て聞き終わると、彼は抱腹絶倒しながら惜しみのない大笑いを贈った。

「お、お前、それ本気で言ってるのか!？」

「うるさい、人類の平和の為なんだよ」

「しっかし驚いたぜ。っつーことは、魔王城で俺とお前は同僚になるのか」

「同僚？」

するとナイトは、珍しく改まった（といってもどこか冗談じみている）声で言った。

「ああ、忘れてた。私ナイトは、この度精鋭隊長として魔王城への勤務が決まりました」

「おいおい……」

とりあえず、ロゼさんやゼフィに注意を呼びかけなければいけない。何せコイツ

「ひょうつ！ 可愛い子発見！」 極度の女たらしなのだ。

「おいナイト、ここは魔王城だ！ そういうことは慎め！」

俺の制止虚しく、ナイトは走り出す。

「ようお嬢さん、初めまして。今日からここで働く」
ターゲットはゼフィさんでした。

明らかに嫌がっている表情のゼフィの気持ちを理解することを知らない彼は、逃げ様のない喋りのマシンガンを乱射する。おいおい、ゼフィさん泣きそうだ。

その時でした。

突然飛んで来た細長い尖ったものが、ナイトの頭を貫いた。鮮血どばー。あ、読者さん、これコメディー小説なので大丈夫でござるよー。

「大丈夫か、ゼフィ」

次の瞬間にゼフィの前に現れたのは、やはりレヴィだった。先程ナイトの頭を貫いたものは爪獣が常備している爪型の千本針だろう。ゼフィさんー、ありがとございます

笑顔で感謝の意を述べるゼフィに対して、レヴィは少しばかり頬を染めながら別の方を向いた。

「か、勘違いするな、お前の為じゃない。城の風紀が乱れるのを案

「ただただ」

「見事なツンデレっぷりを見せてくれたところで、今話を終える」とにする。

僕は調子が悪いとみんな受けに見えるんだ（後書き）

PCの調子が悪くて更新が遅れてしまったことを、まずはお許し下さい。これからも時々更新出来なくなることがあると思いますが、僕ってば携帯電話持ってないんだ（てへっふはあと）。

立たないBLEフラグ

その後レヴィはゼフィと城へ戻ったのだが、そのところは作者によって割愛された。作者が非モテ同盟に加入していることなど関係無いからな。

「こら、ナイト！」

飛んできたのは、ラヴィオラさんの罵声だった。

やれやれといった表情でこちらに歩み寄る。木槍とそこら中に倒れている魔兵士を見て、苦笑いのため息を贈った。それに反するかのように、ナイトはあっけらかんと笑う。

「あ、ラヴィオラさん。厚い歓迎を受けたんで、お返しさせていたかったです」

「まったく、来て早々これか」

一人一人、傷を負った魔兵士達に治癒魔法をかけていくラヴィオラさん。彼は魔法の腕も確かで、負傷した魔兵士達が起き上がる。それはまるで墓場から蘇るゾンビのように。などと比喻すれば良い印象は無いが、魔兵士達は本当にゾンビのように起き上がってきた。

イテテテ……と、腕や頭を押さえる魔兵士達。そのうちの魔兵士Aが一言ぼやいた。

魔兵士A「つたくよー、何だあの強い奴は」

魔兵士B「くそっ、あの野郎め……って、あの黒髪の男！」

魔兵士C「間違い無い、兜は脱いでるが、あの男だ！」

魔兵士D「やつちまえ！」

お約束のことを一通り言い終えたあと、奴等は懲りずにナイトに突撃する。素早い動きで木槍を拾うと、再びバツバツサと魔兵士達を薙ぎ倒した。

魔兵士A B C D「ぐああああー！！！！！！」

ついつい調子に乗っちゃったナイトは、いつものように手加減を忘れてしまったようです。飛びやすく加工されたゴムボールをメジャーリーガーが金属製の上等バットでぶっ飛ばしたかのように、魔兵士達はとんでいってしまいました。

「いい加減にしる！」

本日二度目のラヴィオラの罵声。今度は苦笑いなんて生易しいものは伴っていない。代わりに飛んできたのは、下級魔法の火球ファイアーボールだった。

見事にナイトに引火。

「うあつつー！！！」

ちゅどーん。盛大とは言わないまでも、そこそこ大きな爆発音が響いた。読者さん、本作はコメディイ小説なので大丈夫ですよ。深刻に考えなくても問題ないですよ。

「おい勇者、助けてくれい！」

暫く燃えていたナイトの服を、ラヴィオラさんは水魔法で消化した。

「まったく、精鋭隊長がそれでは先が不安だ」

「大丈夫ですよ、仕事はきちんとかなしますから」

ラヴィオラさんと同じく、俺もこいつがきちんと精鋭隊長としての仕事をこなせるか心配になった。戦い、部隊の指揮だけが精鋭隊長の仕事では無い。人員整理の書類をまとめたり、部下の始末書なども書かなければいけない。彼にそれが無事務まるというのだが……。

「では、私は戻る。お前の寢床は精鋭部隊の宿舎にあるからな」

「了解しました」

ビツ、と直立不動の敬礼をしたナイトに見送られ、ラヴィオラさんは城へと戻っていった。そっぴや魔兵士さん達は大丈夫か？

「とりあえず勇者、これからよろしくな！」

差し出された右手。不安も交えながら、その右手を硬く握った。

数年ぶりに感じたナイトの手の温もりは、昔と変わっていなかった。

た（伏線じゃないよ）。

「そつだ勇者、久々に一戦どうだ？」

俺の手を離し、木槍を拾ったナイトが言う。

コイツの戦い好きは、やーっぱり昔と相変わらずであった。風切り音を出しながら槍を振り回し、挑発的な目で俺を見る。

ナイトと共に冒険をしていた頃、奴はしょっちゅう俺と戦いを申し込んできた。奴は強く、確かな実力を持っており、俺と互角の戦いを繰り広げたものであった。

そんなナイトとの戦績は、百戦五十勝五十敗。それを見ると、俺の剣と奴の槍は本当に互角なのだなぁと痛感せざるを得ない。

「憶えてるか勇者。俺とお前の戦いの成績は、五十勝五十敗。この戦いで、どっちが強いか決めようぜ」

やはり奴も同じことを憶えていた。

今宵は 否、今宵も 奴の挑発に乗ることにする。

「面白い。やってやるよ」

腰に提げた長剣に右手を据える。

奴の目を見る。奴の目は、そこに黒い炎が滾っているかのように輝いていた。

「そつこなくちゃな！」

「殺す気で来い、俺もそうするから」

「つたりめーよ！」

手加減無用（前書き）

うん、すまない更新できない日が続いて。とりあえず読んでくれよ。

手加減無用

風が吹いた。

ナイトの髪が揺れる。その間から覗く黒い瞳は、しっかりと俺を見据えている。その瞳には、一点の濁りも、一気の迷いも無かった。足元の短草がサラサラとざわめく。暫くの間その音を出している短草が動きを止めると同時に、俺は鋭い金属音を伴わせて剣を抜いた。

背筋を伸ばし、穂先を尖らせた木槍を構えるナイト。奴の様子を見伺うが、俺が動かないと自分は動かないぞという風を装っている。ジリ、と一歩、右足を小さく踏み出す。それに反応した様子で、ナイトはいつもものゆるい表情を先ほどより険しくさせた。

再び、風が吹く。さつきよりも強い風。

風は、俺の方に吹いていた。

「でやつ!!」

一閃にナイトの胸めがけて突きを繰り出す。だが奴は、それを得意のバックステップで後方に跳び、いとも簡単に回避した。

「おいおい勇者よ、真剣使ってるんだから手加減しろよ？ まとも当たれば死ぬぞ」

自分の言ったことに対して、だがそんなこと関せず、というような笑いを零すナイト。槍を構えると、命の大事さを忘れるのが彼だ。「大丈夫だ、鎧着けてんだから死ぬことはないだろ」

「いやいや死ぬだろ、常識的に考える」

「問答無用だ!」

ナイトの立つところまで突撃し、その勢いを使って斬撃の弧を描いた。だがそれは、ナイトの跳躍により空を切った。

「上だバーか!」

軽い素材で出来ているとはいえ、騎士の鎧を着込んでいるにしては、かなり高い跳躍であった。彼を見上げるが、太陽に重なり、逆

光で一瞬見えなくなる。

その一瞬で、落下の勢いを利用して、強烈な一振りを放った。攻撃範囲の広い槍が相手である故にステップでの回避は難しいと察した俺は、槍の穂先を剣で止めた。

「んなっ！」

地に足が着くと、そのまま鏢迫り合いになる。押し切られまいと、両者思い切り力を込めて相手を押し出そうとする。

「何だお前、俺が好きなのか？ 離れるよコラ」

ナイトが減らず口をたたく。俺は答えない。

「くらあっ！」

全体重をかけられ、槍が剣を押し負かした。

「ぐっ、やべえ」

柄に届いた衝撃で手がビリビリする。木槍でこれほどの威力なんだから、戦闘用の長槍を装備させたらどうなるんだ。考えたらゾツとする。

「ほらほら、防御がお留守だぜ！」

奴は槍を使わず、素早い半月蹴りを放った。風を切った脚の刃は、俺の横腹に直撃した。

「ぐあはっ！」

鋭利な刃物で裂かれたかのような鋭い痛みが襲う。俺は腹を手で押さえながら、後方へ跳んで距離を置いた。くそっ、痛えなあ野郎。

奴の脅威は、槍術ではなくその体術にある。身軽な彼は、とにかく技を繰り出す速度が半端ではない。特に何も装備していない状態から放たれる拳や蹴りは、目で追うことすら難しい。それ故に彼は装備する武器も重い鉄製より軽い木製で、鎧も最小限の物しか身に付けない。

一発ごとの威力は鉄製の武器に劣る。だが持ち前の素早さでそれを補い、数を打つ戦闘を得意とするのだ。さっきのように隙を見せれば、一気にそこを突かれる。そんな彼とは一対一ではかなり戦い

づらく、敵に回したくない相手である。

この戦い、ナイトのペースになれば間違いなく俺の負けである。

「どうした勇者、来いよ！」

目の前で挑発するナイト。誰が乗ってやるかよ。

答えずにその場で剣を構える。すると徐々にナイトが近付いてきた。

一步、二歩、どんどん距離を縮めてくる。その頃にはもう腹の痛みは忘れていた。

「いくぞ勇者！」

突進してくるナイト。槍を片手で持つと、一閃にそれを横薙ぎした。

それをしゃがんで回避すると、俺は奴の後ろに回った。

「なっ！」

慌てて振り返るナイト。その前に、俺は奴の首を絞めて羽交い絞めにした。

「くそお、やるじゃんかよ勇者さん……。」

「さあ拘束したぞ、このまま降参しとけ？」

「誰がだよ！」

裏拳打ちの構えで、拳を前に突き出すナイト。奴のその動作を見た途端、俺は拘束を解除し、急いで後ろへ逃げるように飛び退いた。次の瞬間、後ろへの肘打ちが空を切った。

「なんだよ、そのまましてくれりゃ昇天させてやったのに」

こちらを振り返り、そんな事を言いやがる。あんなのに当たってたら、冗談抜きで本当に昇天させられちまうところだったよ。

「けど立派だな勇者、俺から後ろを取るとは」

「なら、そろそろ本気を出したらどうなんだ」

すると奴は一瞬動きを止め、そして

「そうだな……。じゃいくぜ！」

自らの武器をその場に捨てて、ファイティングポーズを取った。

「っしやいくぞおいコラ！」

手加減無用（後書き）

自分はなにを今更のこのこ更新してんでしょうかね

五十勝五十一敗

「っしやいくぞおいコラ！」

奴は一瞬にして俺との距離を縮めた。さっきとはえらくスピードが違う。

左手を突き出し、右手の拳を自らの方へ引く。刹那、神速の正拳突きが俺の顔面へと放たれた。

後方へ退けば奴のスピードを以って更に踏み込まれて無駄に大きいダメージを負う。横に跳んでも次の攻撃がすぐに来るだろう。ならば

ガッン。

「なっ、お前」

額を前に突き出し、ダメージを抑えた。

脳が揺れ、少しフラフラとしてしまう。だが頭蓋骨は骨の中でもかなり硬い部類に入るもので、奴の拳にも少なからずダメージは入っているはずだ。

その証拠に、戻された奴の人差し指と中指の付け根の部分は少し赤くなっていた。

「やるじゃんかよ」

言うが早いか、次の瞬間には奴の手刀が俺の頸動脈に襲い掛かってきた。

だが、対応出来ない速さじゃない

「あまいんだよ！」

左手で奴の手首を掴むと、九十度以上に捻った。うっと苦しそうな声を上げるが、すぐに巻き返す。

「まだだあ！」

手首を掴まれた状態から、奴は真っ直ぐの蹴りを打ち込んだ。

さっきと同じ横腹。手首を離し、回避しようとして横へステップを踏むが、奴は咄嗟の判断で蹴りの軌道を修正し、そのせいで俺の肋骨

部分へ直接当たった。

「大丈夫か？ 肋が折れた感触があったが」

俺は答えない。代わりに、奴の足元へチラリと目を遣った。足を引き戻し、奴は左足を僅かながらだが後ろに下がらせた。

直後、奴は後方へステップした。

読み通り！！

「そこだっ！」

いくら体術が凄かるうが、素手と剣じゃ三倍以上の攻撃範囲リーチの差がある。奴のステップが終わらぬ内に、俺は剣の先端を、真っ直ぐナイトの方へ走らせた。

「うああっ！」

着地するまで回避行動は出来ない。それこそ殺すつもりで、奴の胸を突いた。

しかし、

「うおりゃああー！！」

奴は拳を突き出し、そこに剣先を当てさせたのだった。

「お前、マジかよナイト！」

血塗れになった奴の拳と剣を交互に見つめ、俺は驚く。たかだか練習試合に、これほどの覚悟を持ち込んでいたとは。彼とは何度も戦っているが、初めて知ったことだった。

奴は血に塗れた拳を見て、笑った。

「面白くなってきたな勇者！」

血飛沫を飛ばしながら、右と左でがむしゃらに、それでいて速さだけは尋常ではない突きを放ちまくった。それは容赦無く俺の身体を襲う。

真っ赤な拳のあとが俺の服を汚していく。圧倒的な速さの前では、反撃の隙が一切見当たらなかった。

「どうした勇者、このままだと俺が勝っちゃうぜー！」

両腕で必死に防御するのが精一杯だ。だがそれも時間の問題だ。やがて腕が使い物にならなくなる。その前に、その前になんとかし

て隙を見つけないければ

しかしそんな中、ナイトのラッシュが止まった。
見ると、奴の右足が、高々と揚がっていた。

「これで終わりだ！」

上段蹴り。単純だが最高クラスの威力を誇る足技。当たれば、昇天は免れない。当たりどころにもよれば、下手をすれば死が待っている。

威力が大きい分、動きも大きい。後ろにステップを踏めば簡単に回避が可能だ。しかし、今の俺にはそれほどの余裕はなかった。

「うらあああ！」

声を張り上げ、俺は奴の懐へと突っ込んでいった。

そして軸足を掴み、全体重を前方へとかけた。

ドシン。その音と共に、俺はナイトに馬乗り《マウント》になった。

「はあっ……、どうだ」

荒い息を吐きながら、奴の襟首を掴んだ。

「へ、へへっ、俺の負けだ……」

その言葉を最後に、ナイトは失血多量で気を失った。

「ぐっ……、俺もダメだ」

身体に負ったダメージから、ナイトに覆いかぶさるように倒れ伏したのだった。

「やるじゃん、勇者」

「お前もな」

「くそっ、これで五十勝五十一敗か。負け越した」

「けど、俺が普通の木剣使ってたら危なかったな」

「よしっ、またやろうぜ。絶対お前に勝つ」

「そんな時は、今日みたいにぶっ倒してやんよ」

メークインは荒野に香る（前書き）

どうにかしてカツコイイさぶたいとるを付けようとした結果がこれだよ

メークインは荒野に香る

発端は、ラヴィオラさんのこの一言でした。

「すまん勇者君、ちよっくら農場に行ってきたくれ」

雨がよく降る広大なアステカ平原に作られたフィーター尾農場は、その肥えきつた土でどんな野菜も通常サイズの二倍以上に育たせることが出来るので、収穫された野菜が備蓄されている巨大蔵には、常に大きな野菜が沢山詰まれている。そこでは新鮮な野菜と土の良い香りが漂っていた。

辺りは見渡す限り、沢山の野菜が輝くほどに美味しそうな緑を放っていた。青い空には真つ白な千切れ雲が浮かび、その切れ目から差し込む太陽に野菜達は歓喜するかのように葉を上へ向けていた。

どこからどこまでが農場なのかわからないほど広く、その分魔王兵士から成り下がった屯田兵も多い。泥まみれの作業服に身を包んだ彼等は、各々鍬や鋤を手に玉のような汗を額に垂らしていた。

そんな中、俺は木造のバンガローで農場主のディッシュユさんが来るのを待っていた。

最近、この農場で頻繁に農場荒しが出没しているらしい。せつかく作った野菜が、もうすぐ収穫可能という時期に持っていかれるそう。持ち出されるのは大した量ではないのだが、その時に茎や葉が踏みにじられ、周りの野菜までダメになるといふ。

ラヴィオラさんの頼み、それが、農場荒しを撃退せよ、というものだった。ここで作られた野菜は、俺も普段から魔王城で食べているものであり、好物だ。そんな野菜を勝手に持ち出す奴を俺は許せず、二つ返事でこの任務を請け負ったのだった。

簡単な椅子に腰をかけながら、俺は外を見る。農場荒しが荒らした跡らしく、そこだけ土が掘り返されていた。当然、野菜も無い。

ため息をついていると、奥の方から一人の人間の男が現れた。外見は四十代の半ば程度で、口元に蓄えられた立派な白髭が印象的だった。腕捲りされた作業服から覗く腕は、日に焼けていて太い。彼が歩きたびに、脆い床がギシギシと軋んだ。

少しばかり険しい表情で俺を一瞥すると、直後に彼は安心そうに笑った。どうやら彼がドイツシユさんらしい。

「君が勇者か？」

「ええ」

「そうか。私が農場主のドイツシユだ」

「ラヴィオラさんから話は聞いていますでしょうが、最近出沒するという農場荒しの撃退という任務を承ってここへ来ました」

「うむ、助かるよ。農場荒しは、主に夜中に出沒するんだ。それまで君は休んでいてくれ」

「もしよろしければ、畑仕事でも手伝いましょうか？」

「いや、君は農場荒しに備えて休んでおくんだ。相手は、警備にっいていた兵士数人を倒すほどの手練だ。油断は禁物だぞ」

「わかりました」

黒髪ロングストレート

夜中

星が瞬き、肌寒い風が頬を撫でるその時間。漆黒の闇夜に紛れる為の黒い鎧を身に纏った俺は、腹這いの形で、幅が広い脇道に伏せていた。

静寂に包まれた農場は、はっきりいつて不気味である。今にも何か出てきそうで

ガサガサッ

「誰だあ！」

突然の物音に、俺は立ち上がって大声を発した。

直後、俺の右頬を鋭い針のようなものが掠めた。

長剣を引き抜き、両手で構える。直後、今まで伏せの姿勢だったらしい何者かが立ち上がった。遠く、暗いのでよく見えないのだが、細身の姿は……女？

素早い動きで相手へと急接近する。間近で見るそいつは、やはり女だった。

闇と同化しているかのような漆黒のマントを羽織った少女で、長い黒髪は腰まで届きそうだ。刺すような鋭い目つきをしていて、指先には二寸ほどの爪。八重歯にあたる部分には鋭い牙が生えていた。
ヴァンパイア 吸血鬼。いつか本で読んだ、人の血を吸う寿命の無い妖怪だ。

俺は吸血鬼の存在に驚きを隠せなかった。何故なら彼等は、吸血鬼を恐れた人々による100年前の大量吸血鬼狩りで根絶やしにされたのだ。

しかし、目の前の少女の姿は間違いなく本で読んだ吸血鬼のそれである。

「お前、吸血鬼なのか？」

「そんなことはどうでもいい。ここから立ち去れ。さもなければ、お前を殺す」

鋭い視線をこちらに向けた。恐らく、農場荒しの正体はこの吸血鬼だ。そして、今は何故吸血鬼がいるのかなんてことに構ってる場合ではなかった。

「お前が二度と農場荒しをしないと誓えば立ち去ってやる」

刹那、俺との間合いを詰めた彼女は、鋭い爪を横に薙いだ。

それを見切ると、右足を軸にして後方へステップした。

「穏やかじゃないな」

余裕の苦笑いを浮かべると、見下しの口調で彼女は言う。

「立ち去れ。でないとお前を殺す」

直後に唸る俺の豪剣。それによって生じる風切り音。踏み込みの力で威力が増した、水平に繰り出された剣撃を、爪で見事に止めてみせた。

ガキン！

金属音が夜の静寂を破ると、女とは思えない力で、彼女は剣を押し返す。俺は力を込めるが、その爪は驚くほどに硬く、強かった。薄い微笑を張り付けたまま、彼女は剣と爪の鏝迫り合いに勝利した。

直後の攻撃を横へと避けた俺は、久々に味わえる本気の戦闘に躍る心を抑えるのが難しかった。

柄を握りなおすと、俺も彼女と同じ様に余裕の表情を浮かべた。

「そろそろ本気でいくぞ」

「本気？ 私はまだ3割と出していないぞ」

右手だけで持っていた剣を、両手握りに持ち帰る。

目の前の強敵に、俺は本気を出すことを決めた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9333f/>

魔王城は今日も平和です

2010年10月8日12時36分発行